新たな文化伝承の息吹

旭川市博物館

「歌詞が作れるようにアイヌ語を学びたい」。
マレウレウのメンバー。
「川村カ子トアイヌ記念館」のチセ（家）の前で。

透き通った

声が静まりかえった空間に響く。4人の手が中央に置かれたシントコ（行器）の蓋を叩き、リズムを作る。数小節の間をおき、先の声を追う声が追いかける。互いが追い、重なり、離れながら、歌声がシントコの上を回っていく。声が力強くなっていくと、歌の輪は大きくなり、歌声は空間全体に広がる。やがて、聞き手はその輪に囚われる。神聖さと危うい恍惚を同時に感じる歌声だ。マレウレウ。蝶の名を冠したグループはアイヌの伝統的なウポポ（座り歌）を歌っている。その中でも彼女たちが注目しているのがウコウㇰウポポ（輪唱）だ。

「昔の録音を聞いたら、とてもお婆ちゃんたちにはかなわない」と、メンバーのヒサエさんは言う。「それぞれがアイヌの節を持っている。歌い手は多く、豊かな節を持つほど良い。祈っていても物語を語っていても、節があれば歌に聞こえる。節はアイヌの生活の中で増やしていくもの。節はお守りのようなものなんです」。

近年では、若い世代を中心にアイヌ文化、伝統を積極的に学び、取り組む人々が増えているという。

「いつか、自分の節を持って歌いたい。歌と共に、アイヌ語をもっと理解したい。生活と共に言葉を学ぶことによって、さらに歌の理解が深まっていく」。マイマイさんはいう。

アイヌ文化は博物館の中に収まるものではない。一時は、いろりの中の埋み火のように小さくはなってしまったけれど、火は途絶えずに残っている。彼女たちの歌うウポポのように、次を歌う世代も現れ始めている。

『翼の王国』（ANAグループ機内誌）
2008年6月号